

山本 恭正

1. 事業実施の目的

世界遺産登録をきっかけに文化遺産をめぐって様々な解釈が生まれるプロセスを描き出すことによって、熊野における聖地形成の経緯を明らかにし、現代日本における宗教の一側面を考察すること。

2. 実施場所

和歌山県和歌山市、海南市、田辺市、新宮市

3. 実施期日

2021年 1月 14日(木)～ 2021年 1月 17日(日)

4. 成果報告

●事業の概要

本研究の目的は、世界遺産登録をきっかけに文化遺産をめぐって様々な解釈が生まれるプロセスを描き出すことによって、熊野における聖地形成の経緯を明らかにし、現代日本における宗教の一側面を考察することである。当該地域は熊野詣と呼ばれる巡礼が行われた日本を代表する聖地の一つであり、大小様々な儀礼や祭祀が行われ、根付いている場所である。聖地と文化遺産の関係を、コミュニティの視点から、外部の地域イメージや文化遺産イメージとは異なる側面を考察することを本研究の主眼に据えている。遺産における日常的な実践の担い手となるのが、語り部と呼ばれる人々である。熊野古道を歩く観光客に同行し、地域のことを伝える役割を果たしている。彼らの活動は、熊野を聖地たらしめる物語とそれを共有する人々のつながりによって成り立っており、インターネットやメディアを通じて、聖地に関する言説を紡ぐことによって、場所のイメージが生じている。

本研究ではこれらをふまえ、遺産化によって変容する宗教の側面を特に考察したい。申請者は2007年から2008年にかけて、世界文化遺産・熊野古道の再発見のされ方、その後の活用方法、保存(保全)方法を調査した結果、世界遺産へのリスト記載が生み出すものは、「語られる文化」と「生きられた文化」の乖離であることを明らかにした。「語られる文化」の価値は、語り部たちのガイド活動で聞かれる熊野古道の歴史的重要性や文化遺産・文化財に、「生きられた文化」の価値は語り部たちの地域生活において、次世代に継承していきたいことがらに根ざしている。世界遺産が地域の誇れる宝でもある為には、「語られる文化」と「生きられた文化」との整合性が取れている必要があるため、今後は従来の理論的基礎研究ではなく、社会問題の解決を志向する公共人類学的研究を行う。得られた成果は、日本文化人類学会などでの口頭発表や論文投稿などによって公開し、地域社会に還元することを目標とする。

基本的な調査の方法は、それぞれの語り部たちが観光ガイドとして案内する活動に同伴して実施する。事実確認やインタビュー形式の調査を別として、こちらから意図して働きかけたり質

問したりすることは基本的には行わず、ひたすら一緒に歩いたり、行動を共にしたりするような長期のフィールドワーク・参与観察を中心に行いたい。しかし今回は、長期フィールドワークを見据えた短期間での予備調査であり、地域における文化行政のキーパーソンと、文化遺産の担い手たちにヒアリング調査を行うこととした。

今回の調査では部分的に止まるが、年間を通して語り部たちの動きや観光客とのやり取り、文化行政に関連した動き（イベント）、宗教（儀礼）に関して、語り部たちの活動に参与観察して語り部たちの話の内容や行動を記録する。その中で出会った主要なインフォーマントに対しては、今回の調査同様、重点的・反復的なヒアリングも行う。得られたデータは整理・分析して、改めて「語られる文化」と「生きられた文化」の齟齬を問い、実践を介してつながるコミュニティと聖地の関係性を考察したい。作成した論文は総合研究大学院大学の研究紀要に投稿したり、論文ゼミナールにおいて研究発表したりして、成果として形にする。

●本事業の実施によって得られた成果

2021年1月14日から2021年1月17日までは、和歌山県南部エリアに滞在して熊野古道の語り部友の会や文化遺産の担い手たち、文化行政の立場から調査研究活動を実践されている方などを対象として、聞き取り調査を実施した。

総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史専攻で民俗学を学び、2007年から和歌山県教育委員会文化遺産課に入職、現在は和歌山県立紀伊風土記の丘・主査学芸員として和歌山県の民俗芸能・無形民俗文化財を調査・研究する蘇理剛志によると、調査者がこれまで行ってきた熊野の文化遺産を対象とする調査研究には欠けている視点があるという。それは熊野学と呼ばれる1988年に和歌山県那智勝浦町で開催された「日本文化デザイン会議‘熊野88’」を契機として、その方向性が打ち出された学際的・総合的な研究活動が熊野の再発見に寄与したことに対する分析が不足している点である。

熊野イメージの形成は旅との関係、外部のイメージによってもたらされてきた部分が大きいと蘇理はいう。それは古の時代から比較的現代においても変わらない。日本文化デザイン会議によって、現代の熊野イメージが形作られる大きな契機となった。熊野に居住する人々にとって、歴史と現代をつなぎ、都会と田舎をつなぐ結末点となったと思われる。具体的には都会に居住する著名な研究者・知識人が熊野の歴史や文化財が如何に貴重であり、価値があるものであるかということを会議で繰り返し強調したのである。以来、山折哲雄や梅原猛といった多くの著名な思想家・哲学者などが熊野を訪問し、講演をしたり書籍を出版したりするようになった。

和歌山県で文化行政の立場から文化遺産に関わる実務を行ってきた先輩方が蘇理に口をそろえて、懐かしむように言うのは日本文化デザイン会議から潮目が変わったということである。ここからは、蘇理が私に話してくれた内容をそのまま記載する。世界遺産になった熊野文化の基盤は旅人の文化である。参詣道は、旅人の文化そのものであり、旅人がいないと評価されない。重要なのは、旅人が持っている熊野のイメージと地元の人が持つ熊野のイメージが違うことである。

都があつての熊野であり、ある意味でイメージがインスピレーションを与えてくれる。近代に入ってから都会と熊野のつながりが途切れた。熊野は江戸から船で行くにはとてもアクセスのいい場所で文化の大動脈である海上の道によってつながっていた。しかし、鉄道やモータリゼーションによって熊野は次第に取り残された場所になっていく。それを取り戻したのが日本文化デザイン会議である。熊野のイメージの変容は1000年ぐらいの歴史のなかで、繰り返されてきた。明治初期、まだ人々が着物を着ていた頃から、現在の和歌山県新宮市や串本町周辺では文化の伝来によって大阪より早く、洋服文化があつた。

それでは熊野文化の中核である熊野信仰とは何か。旅人が持っていた信仰と地元の信仰が融合し、旅人が全国に持ち返って伝えた信仰である。熊野速玉大社の境内には「奉八度の記念碑」がある。これは江戸時代中期に岩手県から2か月かかる道程を信者が8度も熊野詣を行ったことを記念して建てられた。それほど強い信仰心があつた。熊野の信仰形態は特殊で、おおざっぱに言ってしまうと、何でもありということ。熊野で体験した神秘体験の集合体が熊野信仰に連なっていたのではないかと。非常にニュートラルなもので、場所と道によってつながる縁と出来事の結果。『甦りの熊野』というキャッチフレーズは今から45年前に現・熊野本宮大社宮司・九鬼家隆さんの父親がつけたキャッチフレーズ。湯の峰温泉にまつわる小栗判官伝説になぞらえ生き直しというメッセージを込めた。

以上の蘇理の貴重な語りをまとめると、現代の熊野イメージは比較的近年形作られた傾向があること。日本文化デザイン会議を契機として、多くの著名な知識人によって熊野の再発見が促され、地元の人たちが新たにイメージを創造してきた。その際、熊野学と呼ばれる研究活動が、地元と外部、歴史と現代をつなぐうえで大きな役割を果たしてきたということがうかがえる。

ちなみに、今回の調査では和歌山県新宮市教育委員会文化振興課に事務局を置く、国際熊野学会代表委員の山本殖生氏と新宮市職員・南由起氏を表敬訪問し、今後熊野エリアで調査研究活動を行うにあたって調査者を共同研究という形で受け入れていただくことを承諾していただいた。国際熊野学会は地方行政の立場から熊野学を推進する中核組織であり、調査者も2020年度から正規会員として入会している。2021年4月から約1年間にわたって、実施予定の長期調査では文化遺産に関与する、あるいは関わりたいと願う個人やコミュニティに対してアプローチする際、国際熊野学会を通して紹介していただける場合は紹介を依頼させていただく。また、月に1度調査報告書を作成し、南氏にメールで提出する。最終的に、調査終了予定の2022年3月から1年以内に、研究紀要『熊野学研究』への論文投稿と口頭発表を実施する。

続いて、前述した蘇理から紹介していただいた和歌山県海南市の藤白神社で行った聞き取り調査の成果を記載する。藤白神社権禰宜で和歌山県世界遺産マスターでもある中井万里子によると、藤白神社は2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界文化遺産に登録された後、国史跡に指定され、今後追加登録を目指すという。藤白神社のHPでも、熊野参詣道（熊野古道）紀伊路の藤白王子跡として、熊野一の鳥居（熊野の入り口）と称され、2015年10月7日に熊野参詣道紀伊路の追加指定地域として藤白王子跡（藤白神社境内、鈴木屋敷跡）が国史跡に指定されたと表記されている。

毎年1月1日に奉納される藤白神社の獅子舞は和歌山県指定の無形文化財に指定されており、和歌山市出身の神坂次郎の小説に登場する里神楽が原点で、現・保存会の前身はフランスで演技したこともあるそうだ。以前の保存会は氏子を中心となって結成されていたが、現在は近隣の有志の若者たちを中心に構成されている。

現在の藤白神社を語るうえで、欠かせないのは国（文化庁）・県・市から補助金を受けて進められている鈴木屋敷の復元である。藤白神社のHPでは、平安時代に熊野から藤代の地に移り住み、約122代続いたと言われる鈴木氏の屋敷跡であり、鈴木氏がここを拠点に全国3,300あると言われる熊野神社を建立し、熊野信仰を広めたとしている。神武天皇東征の時、鈴木家の祖先が天皇に稲を献じたので「穂積」という姓を頂いたが、この地では稲を積み重ねたものを「すずき」と言ったことから「鈴木」になったと言われる。姓氏研究家の森岡浩監修の『日本の名字』によると、鈴木氏のルーツは紀伊半島の熊野で、この一族が紀伊国藤白（和歌山県海南市）に移り、王子社の神官となり、熊野信仰と結びついた。ある特定の人物から広がったというより、熊野信仰を布教する人たちの共通の名字として「鈴木」を名乗り、関東・東北まで伝えていった。そのため、藤白神社では鈴木屋敷を根拠として、熊野信仰にとって大きな意味を持つと主張している。

熊野古道紀伊路語り部の会、海南市語り部の会で和歌山県観光ガイド専門員を務める向井元治によると、老朽化が著しい江戸時代後期以降の遺跡は取り除き現在復元中で、最終的には昔のまま統一する方向で建設が進められている。2023年3月末までに完成予定であるという。

藤白神社が世界遺産に追加登録を目指すことになった契機は、2016年10月24日にフランス・パリで開催された第40回ユネスコ世界遺産委員会により、近隣の田辺市で、熊野信仰に関わる鬮雞神社、熊野古道中辺路潮見峠越が追加登録となったことが大きいという。向井自身はボランティアとして活動を行うことが多く、熊野古道紀伊路語り部の会は現在30数名、海南市語り部の会は28名で構成され、新たな語り部の養成ツアーを定期的に企画している。

以上の藤白神社に関する聞き取り調査によって得られたデータをまとめると、同じ和歌山県内にある中辺路や大辺路が追加登録によって登録距離・エリア（コース）を伸ばしたにも関わらず、熊野古道紀伊路では未だに世界遺産登録箇所が皆無であり、今後神社（王子址）や熊野信仰にまつわるユニークなモニュメントにも焦点を当てて、追加登録に本腰を入れて取り組んでいくことが予想される。

本調査では他にも和歌山県立図書館と和歌山県新宮市立図書館郷土資料室に立ち寄り、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」が文化的景観「信仰の山」という切り口で登録されるにあたって申請上の書類や和歌山県熊野地域の民俗誌的文献を中心に文献複写を行った。また、今回調査でお世話になった方々からそれぞれのお立場で他の文化遺産に関わっておられる担い手たちの紹介もしていただいたり、今後していただけたらということになった。また、今回は和歌山県内のみの調査となったが、今後は三重県、奈良県における熊野研究にも力を注ぐ。

以上から本事業の実施によって、改めて博士論文の作成にあたって実施する長期フィールド調査の方向性を検証することが可能となった。今後本事業によって得られたデータを基に、総合研究大学院大学「総研大フォーラム」での口頭発表、研究紀要『文化科学研究』への論文投稿、

東洋大学研究紀要「白山人類学研究会」での口頭発表、『白山人類学』への論文投稿、「国際熊野学会」での口頭発表、『熊野学研究』への論文投稿を視野に入れ、研究活動を進めていく。

●本事業について

前回のレポートでも記述したが、文化人類学を専攻する大学院生にとって現地における調査研究や国内外の学会発表などの研究活動は非常に重要であり、報告者は昨年度に引き続き、地域文化学専攻・比較文化学専攻学生派遣事業の支援を受けてフィールド調査を実施することができた。この事業は非常に有益な事業であり、今度も継続して欲しい。